

発話機能から見た日本語の会話の構造

山 根 智 恵

1、はじめに

近年、文より大きな言語単位を分析し、そこに見られる規則性を明らかにする研究が盛んになりつつある。談話分析、会話分析、あるいはテキスト言語学とよばれている分野である。その中には、言語が持つコミュニケーション機能に助けを借りて、会話の構造の解明を試みるものがある。たとえば Sacks・Schegloff・Jefferson (1974)、国立国語研究所 (1987)、ザトラウスキー (1991) などの研究がそれにあたる。

一見とりとめのないようにみえても、どんな会話にも必ず始まりがあり終わりがある。それが必然的である以上、そこに何らかの規則が働いていると考えてもおかしくあるまい。またその規則の解明を、表面に現れる言語形式だけでなく発話¹⁾が持つ機能に求めることも、会話が話し手と聞き手相互のコミュニケーションであることから考えれば自然なやり方であると思われる。

本研究も、これらの先行研究を踏まえつつ、発話²⁾が持つ機能から日本語の会話の構造を見ていこうとするものである。

2、発話の機能分類

Jakobson (1960) は、言語のコミュニケーション機能を、言語における最も大切な機能だと考え、それを [1] 表出機能 (送り手の内面を表出する機能)、[2] 刺激機能 (受け手に働きかける機能)、[3] 表示機能 (内容事物を表す機能)、[4] 鑑賞機能 (表現を享受させる機能)、[5] 注釈機能 (言葉を意識させる機能)、[6] 接触機能 (送り手と受け手のつながりを保つ機能) の六つに分類した (訳語は林 (1979) による)。この分類は、言語の基本的な機能を押さえている。しかし日本語の会話ということを考えた場合、別の機能分類も考えられる。なぜなら日本語の会話は、他言語の会話に比べあいづちの回数が多く、それが一つの特徴であるともいえるからである。本研究ではあいづちの機能にも着目し、八つの発話機能を定めることにした。

(1) 社交機能

この機能は、人間関係を円滑にするための発話を持つ機能で、Jakobson が「接触機能」と名付けたものを参考にしている。「おはよう」などのあいさつことば、「ごめんね」、「おまたせしました」などの感謝や謝罪、「こちらこそ」のような感謝や謝罪に対する回避、「はい」、「うん」などの呼びかけ、感謝表現に対する応答、「あんまり無理しないでね」のような聞き手に対する思いやりの表現などがこの機能を持つ。

(2) 情報提示機能

この機能は、会話の相手にある情報を伝えようとする機能で、Jakobson がいう「表示機能」と「表出機能」を合わせたものである。ここでいう情報とは、事実内容だけではない。会話の相手に何か伝えたいものやことということで、発話者の感情や意志なども含まれている。たとえば「あのー」、「あつすみませんけれども」のような場づくりの表現、「それで」、「それだから」のような場をつなぐ²⁾接続的表現、事実内容を表現したもの、感情を表す相づちなどがこの機能を持つ。

(3) 応答要求機能

この機能は、会話の相手に何らかの応答を求める機能である。質問、確認、問い返し、聞き返し、同意要求、依頼などの表現がこの機能を持つ。

(4) 会話の相手の話を聞いていることを表す機能（以下「聞く」機能とする）

この機能は、話を円滑に進める役割を担う、聞いているということを示す相づちが持つ機能を指す。

(5) 会話の相手の話を理解していることを表す機能（以下「理解」機能とする）

この機能は、情報に対する了解、会話の相手への理解・知識の共有を示すために打たれる、理解を示していることを表す相づちが持つ機能を指す。

(6) 会話の相手の話に同意していることを表す機能（以下「同意」機能とする）

この機能は、会話の相手に同意していることを示す発話を持つ機能を指す。

(7) 会話の相手の話に否定していることを表す機能（以下「否定」機能とする）

この機能は、会話の相手に意見の相違を伝える発話を持つ機能を指す。

(8) 話の場をつないでいることを表す機能（以下「場」機能とする）

この機能は、会話がとぎれないように相づちを打つことで話の場をつないでいることを相手に示す機能を指す。

3、発話機能の連鎖から見た日本語の会話の特徴

それでは、2節であげた発話の機能は、日本語の会話の中でどのように結び付いているのであろうか。資料として二人の参加者による計七つの電話の会話、述べ1時間8分12秒

を録音し文字化したものを用い、その分析を行った³⁾。はじめに隣接した発話機能連鎖の特徴を、次に発話を隣接より長いまとまり—開始部・中心部・終結部—でとらえた時の機能連鎖の特徴を見てみることにする。

〔1〕 隣接した発話機能連鎖の特徴（表1—5参照）

発話者が一度交代するときに起こる隣接した発話機能連鎖の特徴は、情報提示機能から「聞く」機能、「理解」機能に続く連鎖が多いこと、「聞く」機能、「理解」機能からも情報提示機能に続く連鎖が多いこと、「同意」機能は一人の発話の機能の一部になることが多いこと、「否定」機能や「場」機能から始まる発話はほとんどないことなどである。つまり隣接した発話は、情報を与えあうと言うより、一方の発話者から出された情報をいったんもう一方の発話者が受けとめ受け入れていると言うことができる。

〔2〕 長いまとまり—開始部・中心部・終結部—で見たときの発話機能連鎖の特徴

会話の開始部では、社交対社交の機能連鎖が多く見られる。この機能連鎖は、一組だけでなく何組かつながって現れる。そしてその連なりは、接触開始の第1段階としての「呼びかけ」→「呼びかけ」or「応答」、接触開始の第2段階としての「あいさつ」→「あいさつ」、接触開始の第3段階としての「謝罪」→「謝罪回避」という手順を踏む。つまりまず「もしもし」→「もしもし」のように、発話者同士がお互いのことを認識し、自己提示によりお互いがある者かわかると、「こんにちは」→「こんにちは」のようにあいさつの決まり文句を使ってコミュニケーションのチャンネルが広げられ、さらに「すみません」→「いえいえ」のように会話を進めていく上で、あいさつよりさらに相手の心を慮る表現が用いられていくようになるのである。もちろんあいさつの前に謝罪の表現が出てくることもあるし、社交機能の連鎖の中に情報提示機能を持つ自己提示や、応答要求機能を持つ相手を確認する発話のはさまれることもあるが、会話の開始部においては、社交機能の連続性が会話進展の鍵を握っていると言える。

次に中心部であるが、いくつかの社交機能の連鎖で話の場づくりを終えた発話者同士は、中心部で目的を達成するための会話を行う。しかし初めから目的とする会話の内容に入るのではなく、「えっとですね」、「いやだねえ」、「どう、元気」などの前置きの発話を行って会話の相手の様子を見ながら話を進めていく。そのため前置きの発話に対しては、必然的に「はい」とか「ええ」のような、「聞く」機能が「同意」機能を持った発話で答えるをえない。つまり、中心部の第1段階である話題づくりの場では、情報提示機能→「聞く」機能が応答要求機能→「同意」機能の連鎖が必要になってくるのである。このようにして話題づくりを終えた発話者同士は、いくつかの主要な機能連鎖パターンを繰り返しながら終結部へ向かっていく。そのパターンとは、次に示すようなものである。

(1) 〈情報提示機能→「聞く」機能〉の連鎖は一度で終わることは少なく、二つ、三つ、多いときには七つ、八つと連続して起こる。これは、ある情報が一度に全部提示されるのではなく段階を追って出されることを示している。

例 会話者	会話	機能
F :	それぞれ一時間くらいで	情報提示
C :	はい	「聞く」
F :	えーどういう内容の	情報提示
C :	はい	「聞く」
F :	えー研修をやったと	情報提示
C :	はい	「聞く」

(2) 〈情報提示機能→「聞く」機能→情報提示機能→「理解」機能→情報提示機能→「同意」機能〉の連鎖

この連鎖は、情報の提示者が出す情報の量によって情報の受け手の発話機能が変化していくことを示している。つまり情報が少ししか出されていない段階では、その受け手側は内容の予測がつかないため、「聞く」機能の発話しかできない。ところが情報の内容が明確になるにつれ、その内容が把握できるようになるので、「理解」機能の発話ができるようになる。そして相手が理解してくれたことを踏まえた上で、さらに情報を提示したり理解に対して共感する「同意」機能をもった発話が可能になるのである。

例 会話者	会話	機能
E :	もう、ちょっとねえ	情報提示
A :	うん	「聞く」
E :	だって両眼で0.8かなあ0.1、い、0.あ1.0	情報提示
A :	うんうん	「理解」
E :	ぐらいになるまでにしてたの	情報提示
A :	あっそうなの、前は	「理解」+情報提示
E :	うん、りょうほうの目で	「同意」+情報提示

(3) 終結部へ近づいたことを示す「理解」機能と「同意」機能あるいは「同意」機能〉のだけの連鎖

会話が終結部へ近づくと、「理解」機能と「同意」、あるいは「同意」機能〉だけの組み合わせが多くなる。発話者が一つの情報が終了したことを示す「理解」機能と「同意」機能の発話しか行わないことにより、これ以上自分から新しい情報を提示することはないということを相手に示すことになる。

例 会話者	会話	機能
C :	そうしたらはいっ、とかなんとかとかって ゆってこれればいいかもしれない、うんふん	情報提示+「同意」
K :	うんうんうんうん // // ⁵⁾ うーん	「理解」+情報提示+「同意」
C :	うーん	「同意」
K :	わかったあ	「理解」
C :	うーん	「同意」

最後に会話の終結部であるが、この部分では、開始部と同じように人間関係を円滑に保つための社交機能を持つ発話が多く用いられる。しかも開始部と比較してより長く、まとまってその連鎖は起こる。これは終結部を急ぎ過ぎると会話の相手に唐突な印象を与えるため、一定の長さが必要であるからだと思われる。また、開始部の社交機能を持つ発話は、「呼びかけ」から「あいさつ」そして、「謝罪」の順序で進められることが多かったが、終結部では「謝罪」から「あいさつ」と順序が逆になっており、しかも「あいさつ」は一度でなく繰り返される傾向にある。別れのあいさつを繰り返すことで会話が終了することを惜しみ、会話の相手に不快感を与えることを避けているのだと思われる。

4. まとめ

前節で日本語の会話における発話機能連鎖の特徴を見てきた。まとめとしてそれらを踏まえた上で、日本語の会話における発話機能連鎖のモデルを示したいと思う。

前節で浮かび上がった繰り返し現れるパターンを会話全体の流れでとらえると、そこに基本の発話機能連鎖があることがわかる。それはまず社交機能から始まる。社交機能は、自己提示の役割を担う情報提示機能を間に置き、「呼びかけ」→「呼びかけ」or「応答」→「あいさつ」→「あいさつ」or「応答」→「謝罪」→「謝罪回避」という流れに沿って第1段階から第3段階まで進んでいく。それが終わると話題づくりのために情報提示機能を用いた発話が行われる。この発話は、次の「聞く」機能をもった発話で情報の提示を承認され、さらなる情報提示のため、情報提示機能→「聞く」機能の発話が繰り返される。こうやって情報の内容がわかってくると聞き手となっている発話者は、「聞く」機能から「理解」機能、「同意」機能へと機能の種類を変えた発話を行うようになる。この連鎖は、新たな情報が提示されるたびに繰り返される。そして発話者同士が情報を提示しなくなったところで、終結の第1段階である「謝罪」or「感謝」→「謝罪回避」or「感謝回避」or「応答」の社交機能が現れる。最後に社交機能の第2段階と第3段階である別れのあいさつが連続して起こり会話は終了する。

この基本の発話機能連鎖は、発話者同士が会話の相手の発話を聞き漏らさず、また何の疑念も持たずに受け入れる時に起こる連鎖である。ところが実際の会話では、一方の発話者がもう一方の発話者の情報提示に対して自らも情報を提示したり、その発話者の話に割り込むことで強引に話の主導権を握ったり、聞き逃がしたところを確認したり、というようなことが起こる。このような時、この基本の発話機能連鎖にいくつかのバリエーションが生まれる。たとえば次のようなものである。

(1) バリエーション a

情報提示機能→「同意」機能+情報提示機能

基本の発話機能連鎖では、一人の発話者が話の主導権を握る。もう一方の発話者が情報提示を自ら行いたい場合このような機能連鎖が現れる。

例	会話者	会話	機能
	E :	カッカチンカチンになっちゃう	情報提示
	A :	うーん だからねえ、それ効くとか いってたよ	「同意」+情報提示

(2) バリエーション b

「聞く」機能 |
「理解」機能 | → 情報提示機能 → 情報提示機能 (だから)

話の主導権を握る発話者から、もう一方の発話者がどうしても話の主導権を奪いたい時、「だから」を使って主導権を握っている発話者の発話に割り込むといった形がとられる。

例	会話者	会話	機能
	A :	うん	「聞く」
	B :	だから今度の計算が	情報提示
	A :	だからあれはだから今んとこ来てないなら	情報提示

(3) バリエーション c

応答要求機能→「同意」機能→情報提示機能

話の主導権を握る発話者が、もう一方の発話者に確認したり同意を求めたりしながら話を進めていくときに起こる機能連鎖である。

例	会話者	会話	機能
	F :	まあ、初、初級中級とありましたよねえ	応答要求
	C :	はい	「同意」
	F :	それぞれ何時間ぐらいで	情報提示

(4) バリエーション d

情報提示機能→応答要求機能→「同意」機能

話の主導権を握る発話者の情報提示に対して、もう一方の発話者が確認したり可意を求めたりすることで、主導権を持っていない発話者によって情報に対する補足が行われるときの機能連鎖である。

例	会話者	会話	機能
	C:	あわてふためいちゃってさ	情報提示
	K:	なんか構想発表会みたいだったんでしょ	応答要求
	C:	そう	「同意」

(5) バリエーション e

情報提示機能→応答要求機能→情報提示機能

話の主導権を握る発話者の情報提示に対して、もう一方の発話者がさらなる説明を求めたとき機能連鎖である。

例	会話者	会話	機能
	A:	あとは今全然予定ない	情報提示
	B:	で会社いつまでなの	応答要求
	A:	29	情報提示

これらのバリエーションは基本の発話機能連鎖に組み込まれる形で起こり、会話に広がりを持たせる役目を負っている。それらを統合すると次のような日本語における発話機能連鎖のモデルを作り上げることができる。

日本語の会話における発話機能連鎖のモデル

社交機能：開始の第1段階 [呼びかけ—呼びかけor応答]

↓

情報提示機能 [自己提示]

↓

社交機能：開始の第2段階 [あいさつ—あいさつ]

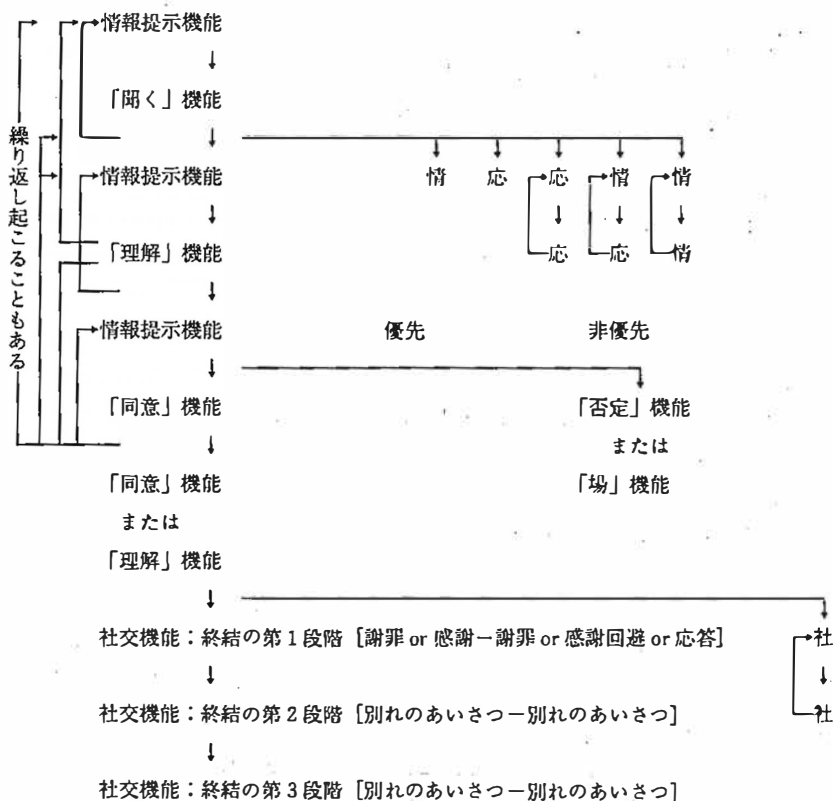
↓

社交機能：開始の第3段階 [謝罪—謝罪回避]

情報提示機能 [話題づくり]

↓

「聞く」機能



※このモデルの全てがいつも起こるのではなく、一部はしばしば省略される。

発話機能の連鎖を分析すると、規則性がないように見える会話にも基本となる構造があることが推察される。今後会話資料の充実を図り、言語の機能面からだけでなく言語形式の面からもその構造を解明していきたいと考える。

注

- 1) 特に話しことばだけに旨及する場合、「文」の代わりに「発話」を用いる。
- 2) 単独で現れた発話だけが情報提示機能を持つと考えた。
- 3) 一つの発話が一つ以上の発話機能を持つこともある。また発話連鎖は、A 1-B 1 (Aの発話の一番目とBの発話の一番目) で一組、B 1-A 2 (Bの発話の一番目とAの発話の二番目) で一組。

組として数えられている。

- 4) 一方の発話者の「呼びかけ」に対し、もう一方の発話者が「呼びかけ」か「応答」のどちらかの発話を行うことを表している。以下、「→」は、発話者が交替することを示すために用いる。また「+」は、一人の発話者が二つ以上の機能を持つとき、機能と機能をつなぐために用いる。
- 5) はっきりききとれなかった発話を表す。

☆参考文献

国立国語研究所(1963)『話ことばの文型(1)―対話資料による研究―』国立国語研究所報告18 秀英出版

_____ (1987)『談話行動の諸相―座談資料の分析』国立国語研究所報告92 三省堂

林四郎(1979)『言語行動概観』南不二男『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店

ボリー・ザトラウスキー(1991)『日本語の談話の構造分析 勧誘の談話のストラテジーの考察』筑波大学大学院文芸・言語研究科平成二年度提出博士論文

堀口純子(1988)『コミュニケーションにおける聞き手の言語行動』『日本語教育』64号

松田鴨子(1988)『対話の日本語教育学―あいづちに関連して―』『日本語学』第10巻第10号

水谷信子(1980)『話しことばの文法の総合的考察―ディスコース分析試論―』『アメリカ・カナダ11連合紀要』3

Jakobson, R. (1960) 'Linguistics and Poetics'. In Thomas A. Sebeok (Ed.), *Style in Language* (pp.350-377). Cambridge: The M.I.T. Press.

Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50. 4, 696-735

(ポーランド ヤギェウ大学講師)

表1 全発話連鎖に占める各機能から始まる発話連鎖

会話資料	A	B	C	D	E	F	G	計
全発話連鎖数	127	148	179	416	423	640	770	2,703
「社交」連鎖数 (%)	20 (15.7)	13 (8.8)	7 (3.9)	15 (3.6)	13 (3.1)	17 (2.7)	19 (2.5)	104 (3.9)
「情報」連鎖数 (%)	36 (28.3)	56 (37.8)	69 (38.5)	149 (35.8)	139 (32.9)	246 (38.4)	307 (39.9)	1,002 (37.1)
「応答」連鎖数 (%)	19 (15.0)	5 (3.4)	13 (7.3)	46 (11.1)	44 (10.4)	71 (11.1)	67 (8.7)	265 (9.8)
「関与」連鎖数 (%)	11 (8.7)	32 (21.6)	32 (17.9)	38 (9.1)	75 (17.7)	97 (15.2)	98 (12.7)	383 (14.1)
「理解」連鎖数 (%)	10 (7.9)	22 (14.9)	27 (15.1)	69 (16.6)	55 (13.0)	67 (10.4)	91 (11.8)	341 (12.6)
「同意」連鎖数 (%)	30 (23.6)	20 (13.5)	28 (15.6)	96 (23.1)	88 (20.8)	132 (20.6)	177 (23.0)	571 (21.1)
「否定」連鎖数 (%)	1 (0.8)	—	—	2 (0.5)	3 (0.7)	5 (0.8)	7 (0.9)	18 (0.7)
「場」連鎖数 (%)	—	—	3 (1.7)	1 (0.2)	6 (1.4)	5 (0.8)	4 (0.5)	19 (0.7)

表2 情報提示機能から始まる連鎖のうち1対1対応をしている機能連鎖の内容

会話資料	A	B	C	D	E	F	G	計
全1対1対応数	29	47	57	108	100	151	208	700
情-社 (%)	—	—	1 (1.8)	2 (1.8)	—	2 (1.3)	—	5 (0.7)
情-情 (%)	10 (34.5)	6 (12.8)	8 (14.0)	22 (20.4)	13 (13.0)	31 (20.5)	47 (22.6)	137 (19.6)
情-応 (%)	5 (17.3)	—	3 (5.3)	14 (13.0)	11 (11.0)	22 (14.6)	23 (11.0)	78 (11.1)
情-関 (%)	8 (27.6)	26 (55.3)	22 (38.6)	29 (26.8)	49 (49.0)	62 (41.1)	58 (27.9)	254 (36.3)
情-理 (%)	3 (10.3)	14 (29.8)	13 (22.8)	30 (27.8)	24 (24.0)	25 (16.5)	49 (23.6)	158 (22.6)
情-同 (%)	3 (10.3)	1 (2.1)	8 (14.0)	11 (10.2)	2 (2.0)	8 (5.3)	30 (14.4)	63 (9.0)
情-否 (%)	—	—	—	—	1 (1.0)	—	1 (0.5)	2 (0.3)
情-場 (%)	—	—	2 (3.5)	—	—	1 (0.7)	—	3 (0.4)

表3 「聞く」機能から始まる連鎖のうち1対1対応をしている機能連鎖の内容

会話資料	A	B	C	D	E	F	G	計
全1対1対応数	7	28	29	30	58	71	71	294
聞-情 (%)	5 (71.4)	25 (89.3)	26 (89.7)	26 (86.7)	56 (96.6)	66 (93.0)	67 (94.4)	271 (92.2)
聞-応 (%)	2 (28.6)	3 (10.7)	3 (10.3)	3 (10.0)	2 (3.4)	5 (7.0)	4 (5.6)	22 (7.5)
聞-理 (%)	—	—	—	1	—	—	—	1 (0.3)

表4 「理解」機能から始まる連鎖のうち1対1対応をしている機能連鎖の内容

会話資料	A	B	C	D	E	F	G	計
1対1対応数	5	16	18	44	23	34	50	190
理-社 (%)	1 (20.0)	1 (6.3)	—	—	1 (4.3)	1 (2.9)	—	4 (2.1)
理-情 (%)	2 (40.0)	12 (75.0)	16 (88.9)	29 (65.9)	9 (39.1)	26 (76.5)	36 (72.0)	130 (68.4)
理-応 (%)	—	—	—	2 (4.6)	2 (8.7)	3 (8.8)	5 (10.0)	12 (6.3)
理-同 (%)	2 (40.0)	3 (18.7)	2 (11.1)	13 (29.5)	11 (47.9)	4 (11.8)	9 (18.0)	44 (23.2)

表5 「同意」機能から始まる連鎖における機能の組み合わせ

会話資料	A	B	C	D	E	F	G	計
全「同」連鎖数	30	20	28	96	88	132	177	571
1対1対応 (%)	10 (33.4)	9 (45.0)	15 (53.6)	42 (43.8)	39 (44.3)	50 (37.9)	67 (37.8)	232 (40.6)
1対2対応 (%)	5 (16.7)	3 (15.0)	3 (10.7)	7 (7.3)	6 (6.8)	5 (3.8)	17 (9.6)	46 (8.1)
2対1対応 (%)	7 (23.3)	6 (30.0)	8 (28.6)	32 (33.3)	28 (31.8)	41 (31.1)	57 (32.2)	179 (31.3)
2対2対応 (%)	4 (13.3)	2 (10.0)	2 (7.1)	6 (6.2)	8 (9.1)	16 (12.1)	18 (10.2)	56 (9.8)
その他 (%)	4 (13.3)	—	—	9 (9.4)	7 (8.0)	20 (15.1)	18 (10.2)	58 (10.2)

- 表注) 1. 「社交」は「社交機能」の、「情報」は「情報提示機能」の、「応答」は、「応答要求機能」の、「聞く」は、「第一発話者の話を聞いていることを表す機能」の、「理解」は「第一発話者の話を理解していることを表す機能」の、「同意」は「第一発話者の話に同意していることを表す機能」の、「否定」は「第一発話者の話に否定していることを表す機能」の、「場」は「話の場をつないでいることを表す機能」の略である。
2. 会話時間は、A-2分55秒、B-2分51秒、C-4分16秒、D-9分、E-10分50秒、F-21分、G-17分20秒である。
3. 1対1対応とは、二人の発話者のどちらの発話も一つの機能しか持たない時の対応ということである。